



エジソンは本を閉じるとティッシュで鼻をかんだ。

都会の片隅の古いアパートの一室。

ゴミ箱をバスケットボールのゴールに見立て、丸めたティッシュをシュートする。

惜しくも外れ。

エジソンは（アパートの住人たちが勝手につけたあだ名だが・・・）椅子から立ち上がるとゴミ箱のそばまで行ってティッシュを拾ってきて、また椅子に座る。

もう一度シュート。また外れ。ゴミ箱のそばまで行ってティッシュを拾ってきて、また椅子に座る。そしてシュートして、外して、ゴミ箱のそばまで行って拾ってきて・・・。

もうすぐエジソンは永遠に消えることのない炎を発明することになる。

しかし、今はまだ本人もアパートの住人も、世界中の誰もそのことを知らない。

少しズルをして上半身を前のめりに、腕を前方に大きく伸ばしてシュートすると、ティッシュはゴミ箱に入った。

電話が鳴る。

「はい、エジソンです（エジソンとは言っていないが便宜上）・・・いいえ、ちがいます・・・していません」

エジソンは受話器を置く。

そしてゴミ箱から先ほど入れたティッシュを取り出すと、再び正しい位置からのシュートを試みる。

外れ。ゴミ箱のそばまで行ってティッシュを拾う。シュートして、外れ。ゴミ箱のそばまで行って拾ってシュートして外れて拾ってシュートして・・・。

日が暮れた。

エジソンは電気もつけずに、食事をとるのも忘れてティッシュを投げ続けている。

もう日付も変わろうかという頃、ようやくゴミ箱にティッシュが入った。

エジソンはふと不安になる。しばし考え込むエジソン。

やがて、エジソンは静かに鼻をかむとティッシュを丸めた。

そしてテーブルの真ん中に置いてあった安物のライターでそっとティッシュに火をつけた。